

アラブ諸国基本教育センター

Arab States Fundamental Education Center (ASFEC),
Markaz el tarbiyat el asâsiyat fi el 'âm el 'arabi.

アラブ諸国基本教育センター(略称アスフェック)は、ユネスコとエジプト政府の協定によって1953年シルスッライヤーン村に設立された。シルスッライヤーン (Sirs el Layyân) は、カイロの北方約60キロメートル、メヌーフィア県にある。

ASFEC はアラブ地域におけるこの種の最大のユネスコ・センターであり、エジプト政府(文部省)から年間1万4500エジプト・ポンド、ユネスコから16万米ドルが供給され、国連、ユネスコ、ILO、WHO、FAO から専門家が派遣されている。

このセンターは3つの目的をもっている。(1)社会教育者、指導員のための基本教育、(2)基本教育と社会開発の分野における実験的研究、(3)教育の手段としての視聴覚備品等の実験的生産。

このセンターの第1目標は、アラブ諸国から集まってくる男女の研修生のために社会教育・指導者としての訓練を与えることである。エジプト、シリア、レバノン、スーダン、リビア、イラク、サウジアラビア、イエメン、クエートから毎年約100名の研修生が集まり、9カ月の間学課と実習の訓練をうけている。研修生の平均年齢は約30歳で、大学卒業者を原則とし、すでに農村社会・生活指導、農業技術指導の経験をもつものが多い。各国の文部省、農業省、厚生省、社会省、地方自治省等から選抜され、研修終了後ふたたび所属官庁で勤務するのが普通である。このセンターがナイル・デルタの農村におかれているとおり、農村社会開発のために必要な知識と技術を訓練することに集中し、アラブの大多数を占める農民(Fellah)の指導方法を模索しているのが、community development にかたより、アラブ農村・農民の指導に不可欠な農業技術、農業経済の研修が手薄になっている。センター内部でも community development から agricultural extension への拡大を要望する声が起こっている。センターの成果の1つとして発表されている(ミメオグラフの形で)村落個別調査報告をみても、社会的分析に集中していることがわかる。

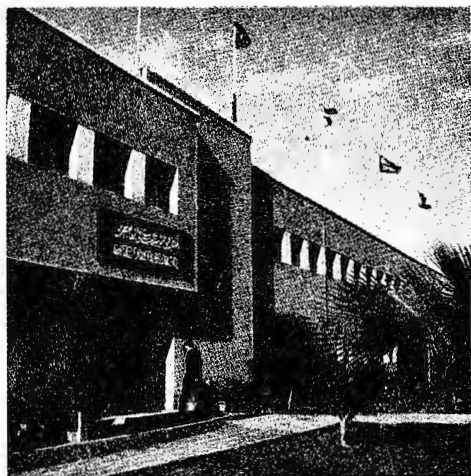
訓練部長は、開所以来 Dr. Hamed Mustafa 'Ammâr

がその職にある。上エジプトのアスワン県出身の社会学者で、学者として卓越した力量をもっており、アイン・シャムス大学社会学科の助教授を兼任している。哲学の段階にあったエジプトの社会学界に農村実態調査をもちこんだ学者の1人であり、Dr. 'Abbâs 'Ammâr とならんで農村調査の双壁といえるであろう。H・M・アッマールの *Growing Up in an Egyptian Village*. (1954, Routledge & Kegan Paul) は、エジプト農村の社会的調査のうえで画期的な業績であった。'Abbâs 'Ammâr, *People of Sharqiya* (2 vols.) の問題、大家族制度の分析を問題として追求している数少ない学者の1人である。

周知のように、エジプトでは地方自治制度の末端にオムダ制(村長制)があり、その職は有力家族の手中にある。センターの調査活動も訓練活動も、まずこのオムダと村の有力家族との接触からはじまる。この状況にあっただけにして村民大衆のなかにはいっていかという技術が研修生の第1課題であり、このために、農民にたいする質疑応答の形式のほか、「農村社会における人的諸関係と人的影響力」や、メヌーフィア県の農村事情に関する小冊子が準備されている。

このセンターの農村社会開発の根本的な考え方は、村の内部からの自生的な変化をいかにして呼びおこすかというところにある。この考え方は、'Abbâs 'Ammâr, *Reconstruction of the Egyptian Village* (1954, Cairo.) および A・アッマール、『デモクラシーとエジプト農村』(1953年、カイロ)に展開されている。初代の調査部長 Jacques Berque (UNESCO Technical Assistance Expert) は、調査によって村民の生活環境・状況を知ることが先決問題であると主張しているが、調査も村と村民の変容をいかに内部からひきだしていくかに方向づけられている。中央集権主義と官僚制によって犬馬のように酷使され誅求され、その結果「役人とは人からものをうばうもの」という敵意をうえつけられてきた農民は、アスフェックのこの考え方によってはじめてうちとけてくるものと期待されたわけである。農民の間から自主的なリーダーシップを育てることは長い年月を要する仕事

研究機関紹介



であるが、アスフェックの実験村のなかにはすでにこの方向に向かっている村がみうけられた。

このセンターの第2の目標として調査・研究があり、調査部がおかれている。調査部長は Dr. Jacques Berque からヨルダン人 Dr. Ibrāhim Abu Lughd を経て、現在第3代目(1961年末にアブ・ルグド氏が転出し、その後任は不明)にいたっているが、調査部の活動は、調査部スタッフが研修生の訓練に時間を奪われているのでそれほど成果をあげていない。調査部の Dr. Mohe-ed-Din Sāber もこの状況を嘆いていた。アスフェック調査部・訓練部の機関紙『基本教育雑誌』(季刊)もどちらかといえば教育的立場から書かれた論文が大多数をしめている。しかしこのセンターは農村社会の研究者にとってかっこうな調査協力者であり、たとえば下記の Dr. Jacques Berque や Dr. Gordon Hirabayashi の成果もこのセンターの協力なしに現われえなかったであろう。

J. Berque. *Histoire Sociale d'un Village Egyptien au XX^e Siècle*. 1957, Mouton & Co.

J. Berque. *Sur la Structure de quelques Villages Egyptiens*. Annales. No. 2, Avril-Juin 1955.

J. Berque. *Dans le Delta du Nil*. Annales de Géographie. 1955.

J. Berque. *Dans le Delta du Nil*. Studia Islamica. 1955.

G. N. K. Hirabayashi & M. F. El Khatib. *Social Consciousness and Means of Communication*. Cairo Univ. Press.

またカイロ・アメリカ大学の社会調査研究所 (American University at Gairo, Social Research Centre) は、

アスフェックと連絡を保って農村調査プロジェクトをすすめている。上記 G. Hirabayashi の報告もその協力調査の一つである。

センターの図書館には、未熟なものではあるが貴重な調査報告(ミメオグラフ)がある。一つはスタッフの指導・監修により研修生が協力して作製した農村個別調査報告書であり、とくに Mr. Rifa't Habbāb が指導した報告がすぐれている。たとえば「カフル・シュブラー・ジギ村——第6グループによる村落予備調査, 1958年4月」、「フィシャー・アツ・スグラ——グループのための一般報告, 1953年7月」、「カフル・シムガルフル・アディーム——グループのための一般報告, 1954年7月」等がこれである。各村ごとに社会と経済の2項目について基本的なデータを整理したもので、農村調査の手がかりとして貴重な資料であろう。農地改革省、農業省、農業協同組合銀行がもっている村落毎の調査は、その目的に必要なかぎりのデータを整理している関係上、村の社会生活についてはふれることがない——例外として農地改革省とアイン・シャムス大学の協力による「ミト・ハラフ村調査報告」がある——ので、その意味からしても見のがせないものである。

他の一つは研修生の修士論文で、これには利用価値のあるものは少ないが、たとえばムーサー・マハムード・アルファの「カフル・ル・バークール村定期市の経済的・社会的研究」(1960年)のようなすぐれた報告がある。

センターの第3の目標は、教育の用具・手段の実験的な生産と改良である。ポスターを例にとれば、製作したポスターを農村に展示し、農民の反響を忠実にとりあげて改良している。また文盲対策を大きくとりあげ、成人学校のためのテキストや読物を出版している。この成果はやがて全国で文盲教育のために活用されるであろう。

【参考文献】

UNESCO. *Sirs el Layyan: light and hope for the Arab world*. 1955, United Nations.

G. C. Anawati. *Les publications du Centre de Sirs el Layyan*. La Revue du Caire, 23^e Année, No. 245, Janvier 1961.

中岡三益, 「ナイル・デルタの農村社会——改革へのアプローチ」, 『アジア近代思想史講座』, 第3巻「アラブのナショナリズム」弘文堂, 昭36, 所収。

【注】 アラビア語版の著書・論文・雑誌名は邦訳名のみを記した。

(アジア経済研究所調査研究第3部 中岡三益)